

津山市の文化財調査 一社寺建築一

建造物研究室

昭和52年度に岡山県近世社寺建築緊急調査を実施し、津山市には近世初頭をピークにして良質の社寺建築が多く遺存していることを知った。今年度は津山市教育委員会の依頼により、さらにこれを精査すべく市全域にわたって悉皆的な調査を行なった。

当地方は古代には美作国府が、中世には院庄に守護所が置かれるなど往古より美作の中心として、また山陽・山陰を結ぶ交通の要衝として栄えた地である。現津山は慶長9年(1604)森忠政が鶴山に城を築き美作一円の領主として入城したのにはじまり、その城下町は今に人口8万余の都市としていびいている。森家は忠政以降元禄10年(1697)にその封を解かれるまでの4代95年の間、代々社寺の造営には特に力をそそいだこともあって、森家時代の建立になる建造物の数は多い。これらは総じて材料・工法ともに勝れ、次の松平家時代のものとは量・質ともに大きな差としてあらわれる。神社では中山神社本殿(重文・1558)を基範とする入母屋造妻入、前方出向拝付きのいわゆる中山造が大多数を占め、美作特有の様相を示す。三間社では総社本殿(重文・1657)、高野神社本殿(1663)、徳森神社本殿(1664)、鶴山八幡神社本殿(重文・1669)の4棟が、一間社では八出神社本殿(17世紀中)、徳森神社住吉社(17世紀中)、千代稲荷神社本殿(1683)、大隅神社本殿(1686)、地藏院愛宕社(1691)の5棟が17世紀の建立になるものとして注目される。一方寺院では、森家の菩提寺である本源寺本堂(1607)が最も古く、以下大型浄土宗本堂である泰安寺(1644)、日蓮宗本堂の形態をもつ妙本寺(1653)、楼門の両翼に唐破風造の仁王堂を付属する愛染寺仁王門(1644)、それに森家代々を祠る本源寺御霊屋・同表門(1693)などがあげられる。

このように17世紀の建立になる社寺建築が一地域にまとまって遺存しているのはむしろ異例というべきであり、このほかにも津山城跡(史跡)を中心とした城下町としてのたたずまいや、多少新しい家も混るものの商家の建物をよく残す林田町から東新町に至る城東地区の町並みなど近世の津山を物語る素材は豊富である。重ねての調査が望まれる。(細見 啓三)